

〈実践報告〉

EGP (English for General Purposes) カリキュラムと ESP (English for Specific Purposes) カリキュラムの特徴及び長所と短所

— 2つの大学のニーズ・アナリシス質問紙調査の結果にもとづく考察を通して —

森 永 弘 司

Abstract

This practical report is a kind of companion piece to one titled “Some Features and Educational Suggestions of the English Curriculum at Doshisha Women’s College of Liberal Arts from the Viewpoints of Needs Analysis Questionnaire Research” printed in the 47th volume of *Asphodel*. I tried to examine the English Curriculum of Doshisha University as a model case of EGP and one of Ritsumeikan University as a mode case of ESP through the same needs analysis questionnaire we used at Doshisha Women’s College. Based on the date of questionnaire research, I could find out some merits and demerits of both universities and educational suggestions which I hope are of some help reconsidering the English Curricula of both universities and Doshisha Women’ College.

1. はじめに

1991年の大学設置基準の改正（一般に「大綱化」と呼ばれている）以前の大学の教養課程での英語教育においては、リーディング、リスニング、スピーキング、ライティングの英語の4技能の全般的な能力の伸長を目指すEGP (English for general purposes) にもとづく英語教育が実践されていた。大綱化以前の英語教育では、英語学習は英語能力の伸長と同時に一般教養を

深めるためのものと捉えられていたので、例えばリーディング教材として硬いエッセーや古典的な文学作品が使用される事が多かった。しかしながら1991年の大綱化以降は、学部の専門教育を視野に入れたESP (English for specific/special purposes) にもとづく英語プログラムを実践する大学が増えてきており、現在はESPにもとづく英語教育が主流になってきている¹。とりわけ医学、薬学、看護学部のように、専門に直結した職場にほとんどの学生が就職する学部、あるいは経済、経営、商学部のような就職先での英語使用の頻度が高い学部でもESP²にもとづく英語カリキュラムの実践が積極的におこなわれている。同志社女子大学でも平成25年度から共通教育の英語講読の授業においてTOEICのリーディングの演習を30分、英語コミュニケーションの授業においてはリスニングの演習を30分おこなうことと、学生の専攻に関連性のあるテキストを使用することが義務付けられた。全般的な英語教育の趨勢はESPに向かっているとはいえ、ESPに立脚した英語教育にも短所がありまたEGPに立脚して英語教育にも長所があるといえる。

今回の実践報告ではEGPにもとづく英語教育を実践している大学のモデル・ケースとして同志社大学を、ESPにもとづく英語教育を実践している大学のモデル・ケースとして立命館大学のBKC (びわこ・くさつキャンパス)の理学学部の英語カリキュラムを取り上げ、学習者が英語教育に関してどのようなニーズを抱いているのか調べるべくおこなったアンケート紙調査の結果を報告するとともに、二つの英語教育カリキュラムそれぞれの長所と短所に関する考察を試みたいと思う。先行研究に関しては、本誌の前号の繰り返しになる部分が多いこと、また今回の論考が理論的な研究ではなく実践報告であるということから先行研究に対する言及は割愛させて頂いた。

2. 同志社大学と立命館大学の英語カリキュラム

最初に同志社大学の文系学部と立命館大学の理工学部および情報理工学部の英語カリキュラムに関して簡単に説明する。最初に同志社大学の英語カリ

キュラムを掲載する。

表1 同志社大学の英語カリキュラム

1 回 生		2 回 生	
前 期	後 期	前 期	後 期
アナリティカル・リーディング I	アナリティカル・リーディング II	イングリッシュ・セミナー I	イングリッシュ・セミナー II 英語演習 (経済学部のみ)
コミュニケーション・イングリッシュ I	コミュニケーション・イングリッシュ II	イングリッシュ・ワークショップ I	イングリッシュ・ワークショップ II 英語演習 (経済学部のみ)

同志社大学の教養課程での英語教育は、文系と理系学部でともに共通のカリキュラムのもとにおこなわれている。1年次に、「アナリティカル・リーディング」と「コミュニケーション・イングリッシュ」を、2年次に「イングリッシュ・セミナー」と「イングリッシュ・ワークショップ」を履修することになっている。1年次のクラスは学部指定があり、原則的に指定されたクラスを受講することになっているが、2年次のクラスは学部指定がなく選択性なので、自分の興味、関心のあるクラスを履修できる。また「コミュニケーション・イングリッシュ」に関しては一部の学部で習熟度別クラス編成が実施されているが、それ以外のクラスでは習熟度別クラス編成はおこなわれていない。「アナリティカル・リーディング」のクラスは、読む力（パラグラフ・リーディング）の強化と書く力（パラグラフ・ライティング）の基礎固めを、「コミュニケーション・イングリッシュ」のクラスはリスニング力と口頭での表現力の強化を目標としている。「イングリッシュ・セミナー」のクラスは、「アナリティカル・リーディング」で身に付けた読解力を、より高度な内容の英文を読むことで伸長することを目指す。読む英文の内容によって人文、社会、自然の3コースに分かれている。「イングリッシュ・ワーク

「ワークショップ」はリーディング、リスニング、ライティングの3つのコースに分かれており、自分が伸ばしたいと思うスキルのクラスを選択して受講できるようになっている。経済学部のみ2回生の後期に、「イングリッシュ・セミナー」と「イングリッシュ・ワークショップ」の代わりに「英語演習」というクラスが設けられている。このクラスはリーディング、リスニング、ライティング、スピーキングの4つのコースに分かれている。テキストの選択に関しては、担当教員の裁量に任されている。同志社の英語教育はESPのように特定の具体的な目的（例えば、理工系の科学英語）は意図しておらず、EGPに立脚した英語教育が実践されており、一般的な英語力の伸長にその狙いがあるといえよう。

次に立命館大学の理工学部の英語カリキュラムを掲載する。

表2 立命館大学理工学部の英語カリキュラム（英語専修コース）

1 回 生		2 回 生	
前 期	後 期	前 期	後 期
英語1 Reading I	英語4 Listening II	英語7 Reading II	英語9 Reading III
英語2 Listening I	英語5 CALL	英語8 Communication III	英語10 Presentation
英語3 Communication I	英語6 Communication II		

立命館大学の理工学部では、教養課程で英語のみを学習する「英語専修コース」と英語と他の外国語を1年次に履修する「英語・初修2言語履修コース」の2つのコースに分かれているが、アンケート調査の参加者は全て「英語専修コース」の学生であったので、ここでは「英語・初修2言語履修コース」のカリキュラムに関しては割愛させていただいた。「英語専修コース」では1回生の前期に「英語1 Reading I」、「英語2 Listening I」と「英語3 Communication I」を、後期には「英語4 Listening II」、「英語5 CALL」「英語6 Communication II」を履修することになっている。2回生

では、前期に「英語 7 Reading II」と「英語 8 Communication III」を、後期には「英語 9 Reading III」、「英語10 Presentation」を履修することになっている。Communication のクラスは英語での会話のスキルの習得を目指すクラスで、CALL (Computer-Assisted Language Learning) のクラスはインターネットを活用して英語学習をおこなうクラスである。Presentation のクラスは英語でのプレゼンテーションの技法の習熟を目指すクラスである。

立命館大学の理工学部の英語カリキュラムは ESP にもとづいている。より具体的に言えば EST (English for Science and Technology) に立脚したカリキュラムといえる。リーディングの授業においては、題材は全て科学や工学を扱ったものであり、英語での科学や工学の知識や英語での専門用語の習得を目指すものである。またリスニングの授業では、リーディングの教材で扱ったトピックに関連した CNN の Science Desk というテレビ番組を視聴することで、英語の聴解力を伸ばすことが意図されている。また理工学部の学生は大学院に進学する学生も多いので、英語での学会発表に備えてスピーキング力やプレゼンテーション能力の向上に関しても配慮されている。

次に立命館大学の情報理工学部の英語カリキュラムを掲載する。

表 3 立命館大学情報理工学部の英語カリキュラム

1 回 生		2 回 生	
前 期	後 期	前 期	後 期
English 1 Listening & Speaking	English 4 Listening & Speaking	English 7 Listening & Speaking	English 9 Listening & Speaking
English 2 Reading & Writing	English 5 Reading & Writing	English 8 Reading & Writing	English 10 Reading & Writing
English 3 CALL	English 6 CALL		

情報理工学部では、1回生の前期に「English 1 Listening & Speaking」、
「English 2 Reading & Writing」、「English 3 CALL」を、後期に「English

4 Listening & Speaking]、[English 5 Reading & Writing]、[English 6 CALL] を履修することになっている。2 回生では、前期に [English 7 Listening & Speaking]、[English 8 Reading & Writing] を、後期には [English 9 Listening & Speaking]、[English 10 Reading & Writing] を履修することになっている。リスニングの授業に関しては科学や工学に特化した教材は使用されていなかったが、リーディングの授業では情報工学の入門テキストが使用されていた。また Listening & Speaking の授業では専門に関連した英語のウェブサイトの作成及び専門に関連したプレゼンテーションをおこなうことが義務付けられていた。情報理工学部の英語カリキュラムも理工学部同様 ESP に立脚したプログラムといえる。

立命館の両学部では習熟度別クラス編成が実施されており、習熟度の一番高い Upper-intermediate から順に、Intermediate, Lower-intermediate および Pre-intermediate の 4 つのレベルのクラス編成がなされている。全体の割合では Upper-intermediate クラスは 2 割程度、Intermediate および Lower-intermediate クラスが合わせて 6 割程度、Pre-intermediate クラスが 2 割程度である。Upper-intermediate のクラスはネイティブの教員が担当し、intermediate のクラスはネイティブと日本人教師が混在しており、Lower-intermediate および Pre-intermediate のクラスは原則日本人教師が担当することになっている。教科書は各レベルの各クラスで統一テキストを使用することになっている。また両学部とも、円滑な授業運営と学生の授業に対する真摯な取り組みを図るために次に述べる項目に該当する行為をおこなった場合、成績評価から 1 点を引く Minus Point System を採用している。1. Chattering in Japanese in class, 2. Being late for class, 3. Forgetting your textbook, 4. Sleeping or nodding off in class, 5. Using your cell/mobile phone in class, 6. Doing any other work except the assigned activities in class.

上記の立命館大学の理工学部および情報理工学部の英語カリキュラムは筆

者がニーズ・アナリシスアンケート調査を実施した2007年当時のものである。立命館大学は大学改革に非常に熱心に取り組まれている大学であり、英語教育のカリキュラムの見直しも適宜おこなわれており、現在は上記とは若干異なるカリキュラムが実施されている。ただしペナルティ制度は現在も実施されている。

3. アンケート調査の参加者およびアンケート調査紙に関して

参加者は同志社大学では全て文系学部のみ、2回生で、総計235名である。学部と各学部の参加者の人数は以下の通りである。法学部86名、経済学部66名、商学部42名、文学部13名、文化情報学部12名、社会学部6名である。立命館大学は理工学部および情報理工学部の1、2回生の intermediate レベルの学生249名と pre-intermediate レベルの学生210名の計459名である。実施したのは同志社大学が2007年度の前期で、立命館大学は2006年および2007年度の前期である。アンケートとして使用したのは Jack C. Richards 著 *Curriculum Development in Language Teaching* に収録されている Needs analysis questionnaire for non-English-background students である。質問紙は全部で88項目の質問で構成されている。原文のままでは学生に理解しにくいものもあるので、筆者が和訳した質問紙を使用した。筆者の判断により、省略した質問項目も若干ある。具体的な質問項目の掲載は紙幅の関係で割愛させて頂いた。本誌第47号に具体的な質問項目を掲載しているので、参照いただければ幸いである。

4. アンケート調査の結果

表1. 4 技能の使用頻度 (以下同志社大学は同の、立命館大学は立の頭文字で記載する。
表の数字は全てパーセンテージで表示している。また質問項目によっては100%に満たない場合があるが、これはアンケートに記入が無いことを示している。)

	非常によく使う	よく使う	時々使う	減多に使わない	全く使わない
Reading	同 41 立 22	同 37 立 36	同 16 立 29	同 6 立 9	同 0 立 5
Listening	同 14 立 20	同 26 立 36	同 24 立 30	同 19 立 14	同 17 立 5
Writing	同 7 立 10	同 19 立 29	同 24 立 30	同 26 立 15	同 10 立 6
Speaking	同 4 立 8	同 10 立 19	同 23 立 37	同 35 立 28	同 37 立 4

表2. 4 技能の使用に苦勞する頻度

	常に	しばしば	時々	減多にない	全くない
Listening	同 18 立 26	同 22 立 34	同 30 立 31	同 13 立 8	同 15 立 1
Reading	同 17 立 21	同 27 立 31	同 34 立 37	同 17 立 9	同 4 立 2
Speaking	同 17 立 36	同 20 立 32	同 19 立 23	同 19 立 8	同 24 立 2
Writing	同 14 立 27	同 23 立 36	同 27 立 27	同 20 立 8	同 15 立 2

現在履修しているクラスでの4技能の使用頻度に関しては、両大学でかなりの相違が見られる。1の「非常によく使う」から3の「時々使う」までの数値を合計した場合、同志社ではリーディングの使用頻度が最も高く94%を占め、次いでリスニングとライティングが共に64%、スピーキングの頻度はかなり低く37%しかない。立命館の場合はリーディングの頻度が最も高く87%を占め、次いでリスニングが86%、ライティングが80%、最も低いのが

スピーキングの64%である。同志社ではリーディングの使用頻度が非常に高いのに対して、立命館の場合はスピーキングの頻度はかなり高いとはいえないが、他の3技能に関してはいずれも80%を超えている。同志社はリーディングとライティングを重視したEGPによく見られるカリキュラム構成になっているのに対して、立命館の場合は基本的に4技能の習熟を目指すカリキュラムになっているが、特にリスニングやスピーキングのようなコミュニケーション・コンピテンスの伸長にも配慮したカリキュラムになっている。この理由は前述したように、理系の学部は文系学部に比べて大学院への進学率がかかなり高く、大学院に進学した場合、学会での発表は英語でおこなう場合が多い。従って理系のESPではプレゼンテーションに必要とされるリスニングやスピーキングの力の強化が重視される。この口頭でのコミュニケーション能力の養成を配慮したカリキュラムは立命館大学のESPの一つの特徴といえる。

4技能の使用に関して苦勞する頻度については、1の「非常に苦勞する」から3の「時々苦勞する」までの数値を合計した場合、立命館ではおよそ90%の学生が4技能全ての使用に苦勞している。この原因は筆者の立命での教授経験から、テキストおよび授業のレベルがかかなり高いことにあるといえる。同志社ではリーディングが78%、リスニングが70%、ライティングが64%、スピーキングに関しては36%にすぎない。スピーキングの割合が低いのは授業でスピーキングをおこなう機会が少ないことを反映していると思われる。

表3. クラスで良い成績を取るための英語能力の重要性の度合い

	非常に高い	高い	どちらとも言えない	やや低い	低い
Reading English	同 44 立 30	同 30 立 33	同 20 立 30	同 5 立 2	同 1 立 4
Listening to English	同 25 立 27	同 29 立 37	同 24 立 28	同 11 立 4	同 12 立 4

Writing English	同 15 立 25	同 31 立 38	同 30 立 28	同 12 立 5	同 12 立 5
Speaking English	同 7 立 19	同 18 立 24	同 29 立 36	同 20 立 11	同 26 立 10

表 4. 将来の仕事で成功するための英語能力の重要性の度合い

	非常に高い	高い	どちらとも言えない	やや低い	低い
Listening to English	同 31 立 31	同 37 立 34	同 24 立 27	同 6 立 5	同 3 立 4
Speaking English	同 32 立 33	同 32 立 30	同 26 立 29	同 5 立 5	同 3 立 4
Reading English	同 22 立 22	同 33 立 35	同 33 立 34	同 7 立 5	同 4 立 3
Writing English	同 13 立 14	同 30 立 32	同 41 立 39	同 9 立 10	同 6 立 5

英語のクラスで良い成績をとるための4技能の重要度に関しては、同志社では読解力が74%、聴解力が54%、ライティング力が46%、会話力が25%の順で、立命館では聴解力64%、読解力63%、ライティング力62%、会話力43%の順である。同志社では読解力の比重がかなり大きいですが、立命館の場合は読解力を除く3技能の比重が同志社よりも大きい。

自分が将来就きたいと思う仕事で成功をおさめるための4技能の重要度に関しては、両大学ともかなり類似した傾向を示している。聴解力は同志社で68%、立命館が65%、会話力は同志社で64%、立命館が63%、読解力は同志社で55%、立命館が57%、ライティング力は同志社で43%、立命館が46%である。両大学共に学生は将来の仕事においては口頭でのコミュニケーション能力を重視していることがわかる。

表5. スピーキングの際に苦勞する頻度

	いつも	しばしば	時々	滅多にない	全くない	該当しない
英語でどう言えば いいかわからない	同 34 立 53	同 31 立 28	同 21 立 14	同 6 立 4	同 1 立 1	同 7 立 0
自分が言いたいこ とを速く言う	同 31 立 41	同 33 立 33	同 18 立 17	同 6 立 6	同 2 立 1	同 9 立 2
口頭で英語で発表 する	同 25 立 36	同 32 立 33	同 23 立 23	同 7 立 6	同 3 立 1	同 10 立 1
英語を正しく発音 する	同 26 立 25	同 27 立 33	同 27 立 27	同 9 立 11	同 5 立 3	同 5 立 1
英語で話そうとする 時、間違えないよう	同 23 立 28	同 27 立 28	同 27 立 25	同 12 立 14	同 3 立 3	同 8 立 2
英語のディスカッ ションに加わる	同 33 立 32	同 25 立 28	同 18 立 20	同 7 立 10	同 3 立 4	同 15 立 7

「全くない」はネイティブの授業を受講していてもスピーキングに関して各質問項目で苦勞することがないということを示している。「該当しない」はネイティブの授業を受講していないか、ネイティブの授業を受講していても質問項目に該当するスピーキング活動が行われていないかのどちらかに当てはまる場合である。表6のリスニングの際に苦勞する頻度に関して、事情はスピーキングと同じであることを付言しておく。スピーキングで苦勞する度合いは、両大学共に全ての事項でかなり高い。1の「いつも」から3の「時々」を合わせると立命館の場合、全ての質問項目に関して80%を上回っているが、「英語でどう言えばいいかわからないので苦勞する」が95%、「口頭で英語で発表する時に苦勞する」が92%、「自分が言いたいことを速く言う時苦勞する」が91%で、特にこの3つの事項で苦勞していることが伺える。同志社の場合は、「英語で話そうとする時、間違えてはいけないと思い苦勞する」が77%、「英語のディスカッションに加わるのに苦勞する」が76%で、これ以外の質問項目は全て80%台の数値を示している。両大学共にスピーキングに関してはかなり苦勞している様子がうかがえる。

表6. リスニングの際に苦勞する頻度

	いつも	しばしば	時々	滅多にない	全くない	該当しない
英語で長々と説明されるのを理解する	同 30 立 47	同 26 立 24	同 21 立 19	同 6 立 6	同 1 立 1	同 15 立 3
口頭での英語の指示を理解する	同 21 立 30	同 23 立 30	同 27 立 24	同 10 立 11	同 3 立 2	同 15 立 3
コロキアルな口語表現を理解する	同 24 立 28	同 24 立 22	同 21 立 30	同 9 立 8	同 2 立 2	同 16 立 9
話の主題を理解する	同 17 立 24	同 25 立 28	同 27 立 31	同 12 立 12	同 4 立 3	同 14 立 3
講義を理解する	同 20 立 31	同 26 立 26	同 20 立 30	同 11 立 9	同 3 立 1	同 20 立 4
講義のノートを取る	同 14 立 17	同 23 立 17	同 19 立 24	同 17 立 23	同 3 立 7	同 24 立 11
テキストの分りにくい箇所を質問する	同 14 立 24	同 20 立 21	同 21 立 28	同 17 立 14	同 3 立 5	同 24 立 9

リスニングに関して苦勞する度合いも、スピーキング程ではないが、立命館の場合はかなり高いといえる。1の「いつも」から3の「時々」を合わせると一番低いのは「英語でおこなわれる講義のノートを取るのに苦勞する」で58%、次に低いのが「授業で使用しているテキストの分りにくい箇所を英語で質問するのに苦勞する」の73%であるが、それ以外の質問項目は全て80%を越えている。同志社の場合は、一番低いのが「授業で使用しているテキストの分りにくい箇所を英語で質問するのに苦勞する」で55%、次に低いのが「英語でおこなわれる講義のノートを取るのに苦勞する」で56%、最も高いのが「英語で長々と説明されると理解するのに苦勞する」で77%であった。

表7. ライティングの課題作成の際の重要度

	とても高い	高い	そんなに高くない	わからない
自分の考えを明確に表現する	同 39 立 45	同 46 立 39	同 11 立 13	同 3 立 2
自分の考えを適切に表現する	同 39 立 42	同 44 立 43	同 11 立 13	同 4 立 2
自分の考えを展開する	同 33 立 35	同 47 立 43	同 15 立 20	同 3 立 2
全般的英作の力	同 32 立 35	同 48 立 46	同 15 立 16	同 5 立 3
正しい文構造で書く	同 29 立 36	同 49 立 45	同 19 立 16	同 3 立 2
適切な単語を使う	同 23 立 28	同 54 立 46	同 19 立 23	同 3 立 2
パラグラフの構成	同 23 立 25	同 49 立 44	同 21 立 26	同 6 立 3
期限までに課題を提出する	同 42 立 48	同 30 立 30	同 20 立 19	同 6 立 3
スペルを正しく書く	同 23 立 26	同 43 立 45	同 26 立 26	同 4 立 3
正しく句読点を打つ	同 8 立 14	同 36 立 45	同 50 立 26	同 6 立 3

ライティングの技能の重要度を問う質問項目に関しては、両大学共に「正しく句読点を打つこと」(同志社44%、立命館59%)以外の全ての項目に対して、かなり高い重要性を認めている。同志社では、「正しく句読点を打つこと」以外で一番低いのは「スペルを正しく書くこと」で66%、それ以外の質問項目は70~80%台の数値を示しており、一番高いのは「自分の言いたいことを、明確に表現すること」の85%である。立命館もほぼ同様の傾向が見られ、「正しく句読点を打つこと」以外で一番低いのは「パラグラフの構成」で69%、それ以外の質問項目は70~80%台の数値を示しており、一番高いの

は「自分の考えを適切に表現すること」で、85%、次いで「自分の言いたいことを、明確に表現すること」で84%の数値を示している。

表8. ライティングの課題作成の際の困難さの頻度

	頻 繁 に	時 々	全くない	わからない
自分の考えを明確に表現する	同 41 立 48	同 48 立 42	同 6 立 6	同 4 立 3
正しい文構造で書く	同 37 立 44	同 51 立 44	同 15 立 9	同 4 立 3
全般的英作の力	同 37 立 45	同 49 立 41	同 9 立 10	同 4 立 4
自分の考えを適切に表現する	同 34 立 39	同 50 立 45	同 10 立 12	同 5 立 3
適切な単語を使う	同 31 立 39	同 52 立 48	同 10 立 10	同 6 立 3
自分の考えを展開する	同 29 立 38	同 54 立 44	同 11 立 13	同 4 立 4
パラグラフの構成	同 27 立 30	同 55 立 50	同 11 立 16	同 6 立 4
スペルを正しく書く	同 25 立 28	同 56 立 52	同 11 立 17	同 4 立 3
期限までに課題を提出する	同 30 立 33	同 37 立 35	同 26 立 28	同 6 立 4
正しく句読点を打つ	同 13 立 18	同 49 立 50	同 31 立 28	同 6 立 5

難しさの頻度を問う質問項目に関しては、両大学共に重要度よりもさらに数値が高い。両大学共に頻度が一番低いのは「正しく句読点を打つこと」（同志社62%、立命館68%）で、次に低いのが「提出期限までに、ライティングの課題を提出すること」（同志社67%、立命館68%）であるが、それ以外の全ての質問項目は両大学で全て80%を越えており、ライティングの課題作成にあたってはかなりの苦渋を味わっているようである。

表9. リーディングの時に読みたい題材

	読みたい		読みたい
雑誌の記事	同 76 立 58	コンピューターを使って読む記事	同 30 立 35
小説	同 67 立 56	専門の論文	同 24 立 25
新聞記事	同 64 立 42	実験の説明記事	同 21 立 27
本の抜粋	同 53 立 35		

リーディングの授業で教材として読みたいものを問う質問で、半数以上が読みたいと答えたのは、同志社では「雑誌の記事」、「新聞記事」、「小説」、「本の抜粋」で、立命館の場合は、「雑誌の記事」、「小説」であった。一番に人気が高かったのは両大学とも「雑誌の記事」（同志社76%、立命館58%）で、二番目が「小説」（同志社67%、立命館56%）であった。最も人気がなかったのは同志社では「実験の説明記事」（21%）で、二番目が「専門の論文」（24%）であった。立命館で最も不人気だったのは「専門の論文」（25%）で、次いで「実験の説明記事」（27%）であった。両大学とも教材の好みに関しては、類似した傾向を示しているが、立命館の理系の学生が科学英語に対して食傷気味で「雑誌の記事」や「小説」を読みたいと考えている点が注目される。

表10. 各々の題材を読む際の困難度の頻度

	しばしば	時々	全くない
専門の論文	同 76 立 78	同 20 立 15	同 4 立 7
実験の説明記事	同 69 立 73	同 25 立 20	同 5 立 7
コンピューターを使って読む記事	同 58 立 63	同 37 立 31	同 5 立 6

新聞記事	同 58 立 60	同 38 立 34	同 4 立 6
小説	同 56 立 59	同 36 立 34	同 8 立 7
本の抜粋	同 51 立 59	同 44 立 35	同 5 立 6
雑誌の記事	同 43 立 50	同 51 立 43	同 6 立 7

上記の教材を読んだ時に感じる難度の頻度に関しては、1の「しばしば」と2の「時々」を合わせると、両大学とも全ての教材に対して90%以上の学生が難しいと感じていることが判明した。両大学共にリーディング教材採用にあたって学生の英語能力に見合った教材を選択する配慮が望まれる。同志社の場合は教科書の選択は個々の担当者の裁量に任されているので、学生の力に見合った適切なテキストを使用されている先生もおられると思われるが、立命館の場合は、全てのクラスで統一教材が使用されているので、学生の英語能力に見合ったテキストの選択が切に望まれる。

表 11. リーディングの際に経験する頻度

	いつも	頻繁に	時々	まれに	全くない
速く読んで大意を理解する	同 22 立 31	同 33 立 26	同 36 立 32	同 7 立 9	同 2 立 2
テキストの主題の理解	同 21 立 21	同 40 立 27	同 30 立 37	同 7 立 13	同 2 立 3
ゆっくり読んで、細部を理解する	同 18 立 19	同 31 立 33	同 35 立 38	同 14 立 8	同 2 立 3
著者の立場や意図を理解する	同 18 立 23	同 40 立 25	同 22 立 36	同 16 立 12	同 4 立 5
未知の単語を文脈から推測する	同 16 立 30	同 30 立 26	同 39 立 31	同 13 立 10	同 3 立 3
専門用語を理解する	同 16 立 28	同 22 立 28	同 34 立 28	同 25 立 13	同 3 立 4

速く読む	同 15 立 29	同 26 立 23	同 35 立 32	同 21 立 12	同 3 立 5
批判的に読む	同 12 立 25	同 26 立 22	同 35 立 35	同 22 立 13	同 5 立 7
速く読んで特定の情報を 探し出せる	同 12 立 24	同 37 立 30	同 37 立 33	同 11 立 11	同 3 立 2
テキストの構成を理解す る	同 8 立 20	同 35 立 31	同 45 立 37	同 8 立 10	同 3 立 2

リーディングの際に経験する事柄に関する質問項目に関しては、1の「いつも」から3の「時々」を合わせると、立命館大学の場合、全ての項目に対して80%以上の学生が経験すると答えている。同志社の場合は、「テキストで使われている専門用語を理解できる」が72%、「批判的に読むことができる」が73%、「速く読むことができる」が75%で、それ以外の質問項目は80%以上の数値を示している。1の「いつも」の項目を比較した場合、立命館が全ての質問項目で同志社を上回っており、全般的に立命の学生の方がリーディングのストラテジーを念頭においてテキストの読解にあたっていることが読み取れる。この事は立命の統一リーディング教材がリーディング・ストラテジーを身に付けるよう配慮されたテキストであることに起因している。

表 12. 全般的な英語力向上のための重要度

	非常に高い	高 い	どちらとも いえない	やや低い	低 い
全般的なリスニング力	同 38 立 49	同 36 立 33	同 15 立 12	同 8 立 4	同 2 立 2
語彙力の増強	同 42 立 47	同 26 立 30	同 22 立 17	同 6 立 4	同 3 立 2
英語でフィクションが書 ける力	同 30 立 33	同 36 立 33	同 22 立 26	同 8 立 5	同 4 立 4
発音、イントネーション、	同 24	同 42	同 24	同 6	同 3

ストレスを聴き分ける力	立 24	立 36	立 30	立 7	立 3
英語でのディスカッションに参加できる力	同 33 立 37	同 31 立 33	同 22 立 22	同 9 立 6	同 4 立 2
スピーチやプレゼンをおこなう力	同 39 立 44	同 24 立 30	同 23 立 20	同 9 立 5	同 4 立 2
教員と教室の外で英語で上手くコミュニケーションをとる力	同 27 立 28	同 34 立 31	同 24 立 28	同 11 立 7	同 4 立 5
速読の力	同 32 立 34	同 29 立 29	同 27 立 27	同 8 立 6	同 3 立 4
友人との共同プロジェクトを英語でおこなう力	同 23 立 25	同 29 立 33	同 31 立 32	同 12 立 7	同 6 立 3
英語でエッセーを書ける力	同 13 立 21	同 30 立 29	同 36 立 32	同 15 立 11	同 6 立 7
英語でおこなわれる講義でノートを取る	同 11 立 11	同 26 立 22	同 40 立 43	同 16 立 17	同 15 立 4
英語で実験報告書を書ける力	同 13 立 25	同 24 立 29	同 39 立 30	同 16 立 9	同 9 立 7

英語力を向上させたいと思った時の重要度の上位の3つに関しては、同志社の1位は「全般的なリスニング力」(74%)、2位は「語彙力の増強」(68%)、3位は「発音、イントネーション、ストレスを聴き分ける力」と「英語でフィクションが書ける力」(67%)であった。立命館大学の場合は、1位が「全般的なリスニング力」(82%)、2位が「語彙力の増強」(77%)、3位が「スピーチやプレゼンをおこなう力」(74%)であった。逆に重要度の低いものは、同志社では「英語でおこなわれる講義でノートを取る」と「英語で実験報告書を書ける力」で共に37%であった。立命館では「英語でおこなわれる講義でノートを取る」で33%であった。全般的に各質問項目の数値は立命館大では高く、「英語でおこなわれる講義でノートを取る」以外の項目の重要度は全て50%を超えていた。

表 13. 授業改善のため実施したほうがよいこと

事 項	賛 成
教材を易しくする	同 25 立 25
読解の教材に関しては、サマリーを配布して欲しい	同 24 立 23
もっと多肢選択の問題を増やす	同 23 立 23
リーディングの分量を減らして欲しい	同 21 立 20
担当の教員に個人的に教えてもらう時間を設けて欲しい	同 21 立 14
テキスト以外の資料の配布を増やす	同 17 立 23
グループワークやペアワークを減らす	同 10 立 16
授業でもっとパワーポイントを使用したほうが良い	同 6 立 13

授業改善に関する質問項目では、同志社大学で20%を越えたのは「教材を易しくする」(25%)、「読解の教材に関しては、サマリーを配布して欲しい」(24%)、「テストやクイズでもっとマルチプル・チョイス(多肢選択)の問題を増やす」(23%)、「リーディングの分量を減らして欲しい」(21%)、「担当教員に個人的に教えてもらう時間を設けて欲しい」(21%)であった。立命館の場合は、「教材をやさしくする」(25%)、「テキスト以外の資料の配布を増やす」(23%)、「テストやクイズでもっとマルチプル・チョイス(多肢選択)の問題を増やす」(23%)、(6)「読解の教材に関しては、サマリーを配布して欲しい」(23%)、(7)「リーディングの分量を減らして欲しい」(20%)であった。両校ともにリーディングで苦慮している学生が5分の1ほどいることが注目される。

5. アンケート調査結果にもとづく同志社大学と立命館大学の 英語カリキュラムの特徴の考察と教育的示唆

上記のアンケート結果と両大学での教育経験を踏まえ、両大学の英語カリキュラムの特徴と長所と短所に関して考察し、教育的示唆に関して述べたい。教育的示唆に関しては、私の個人的見解にもとづくものも多いかもしれないが、両大学の学生の英語力向上を願っての提言であることを付言しておきたい。

最初に EGP と ESP という両大学採択している英語カリキュラムの枠に関係しない問題点に関して言及したい。一点目は両大学とも全般的に学生の英語力から考えて難度の高い授業が実践されているように推察される。この原因は両大学の教員が学生の英語力を何とかして伸ばしてやりたいという教育的熱意に起因する所が大きいと考えられるが、授業の難度が高すぎると学生のモチベーションを低下させる原因にもなるので、テキストレベルや授業レベルを余り高くしない配慮が望まれる。立命館大学の場合はプレイスメント・テストを実施しその成績に応じて3つのレベルに学生を振り分けているが、私の Intermediate および Pre-intermediate クラスでの授業経験からみて、両レベルのテキストは学生にはかなりレベルの高いものと思われる。同志社は一部習熟度別クラス編成を実施しているクラスもあるが、基本的に習熟度別クラス編成は実施しておらず、英語力の高い学生と低い学生が混在している。そのために5人に1人の学生が「担当の教員に個人的に教えてもらう時間を設けて欲しい」と答えているので、授業レベルが高くなり過ぎないようにする十分な配慮を行うことが必要である。

次に同志社大学の英語プログラムの特徴と問題点を考えてみる。同志社の場合、立命館と比較して1年次の英語のクラスが1クラス少ないためにスピーキングの活用に対する配慮が十分とはいえず、スピーキングの活用度がかなり低くなっている。同志社は伝統的に liberal arts を教育理念として標

榜してきた大学なので、立命館のように1年次の第二語学の履修を英語に振り替えることはできないと思われるが、将来の仕事で学生が重視しているのが聴解力と会話力という口頭でのコミュニケーション能力なので、「コミュニケーション・イングリッシュ」の中で、リスニングとスピーキングを隔週でおこなうようなカリキュラム変更が望ましい。またクラスでの使用頻度が読解力が突出して高いので、2年次の「イングリッシュ・セミナー」と「イングリッシュ・ワークショップ」に選択必修のスピーキングのクラスを設置し、前・後期で各々1つのスピーキングのクラスを履修することを義務づけるようにするのも一案である。また世界的に見て英語の重要度がますます高まってきているので、理系学部の場合は立命館のようにESPに立脚した英語カリキュラムにシフトし、1年次で3つの英語科目を履修させることも一考に値すると思う。二つ目の特徴として1年次クラスで習熟度別クラス編成が実施されていないことがあげられる。このことは英語カリキュラム一般の問題であることは既にこの章で述べたが、もう一度繰り返させていただく。長所としては習熟度の低い学生が英語力を伸ばそうと奮闘するケースが考えられる。しかし授業レベルが高すぎるとやる気を無くしてしまう逆のケースも十分考えられる。また習熟度の高い学生が授業レベルが低いとやる気を無くすケースもある。2年次の「イングリッシュ・セミナー」と「イングリッシュ・ワークショップ」は選択性なので、習熟度の異なった学生が混在することは致し方ないが、1年次の学部別の「アナリティカル・リーディング」と「コミュニケーション・イングリッシュ」は習熟度別編成にすることが望ましいと考えられる。担当教員から個人的に教えてもらう時間を希望している学生が2割いることを看過すべきではない。三つ目の問題点としては、e-learningの充実化があげられる。将来就きたいと思う仕事での成功の鍵および全般的な英語力を伸ばす上での重要度が一番高いのが聴解力であり、聴解力を伸ばすには教室でのリスニングの授業だけでは十分とはいえず、教室を離れてもできるだけ大量の英語を聴くことが肝要である。

次に同志社大学の英語カリキュラムの優れている点について述べる。一点目は語学教育の持つ教養的側面に配慮がなされている所である。経済学部や商学部ではビジネス英語、法学部では法学英語、理系の学部では科学英語に焦点を当てたESP的色彩の強いカリキュラムを採択すると、確かに専門教育の導入になるし、英語での専門用語の習得には役立つかもしれないが、教養を深め視野を広めるといふ点ではかなり疑問が残る。また学生が全般的な英語力を向上させる上で重視している「語彙力の強化」の点でも、筆者の調査でもESPよりも同志社のようなEGPにもとづく英語カリキュラムの方が語彙力の増強には有効性が高いことが判明している⁴。また知的な議論をするための基礎的な能力である教養を伸ばすためには専門に囚われない読書が必要である。担当者がテキストを自由に選べ、古典的な作品や文学作品の講読も許されている点は大いに評価できる⁵。二点目は2年次の科目が選択できることである。「好きこそ物の上手なれ」という言葉があるが、どの科目であれ生徒のモチベーションが上がらなければ期待した学習効果は生まれない。学生が自分の英語学習のニーズに応じてクラスを選択できるよう工夫されている点も同志社の英語カリキュラムの長所といえる。

次に立命館大学の英語カリキュラムの特徴と問題点を考えてみる。この章で最初に述べたことの繰り返しになるが、重要な点なのでもう一度ここに書かせていただく。問題となるのは、テキストレベルがかなり高いために、多くの学生が授業について行くのに苦慮している点である。立命館では習熟度別クラス編成が実施されているので、それぞれのレベルに配慮したテキストが採択されているとは思いますが、クラスのテキストレベルはかなり難度が高いため、もう少しテキストレベルを下げるのが望まれる。立命館の両学部ではリーディングでは科学を素材にした読み物を読んでいるのであるが、読みたいリーディングの題材に関するアンケートが示しているように、学生自身は専門に特化した題材は余り読みたくないと考えており、半数の学生が「雑誌の記事」や「小説」を読みたいと考えているのでこうした学生のニーズも

考慮すべきである。従って二点目の問題点としては、理系の記事に特化せずいろいろなジャンルの記事や小説のようなフィクションもリーディングの題材として導入すべきことがあげられる。そのために同志社の「イングリッシュ・セミナー」と「イングリッシュ・ワークショップ」のように2年次のリーディングのクラスを人文、社会、自然のようなコースに分け、学生に選択させることも学生のモチベーションを高めたり、教養を深化させる上で有効かと思う。三点目はかなり大量の英文を速読させる授業が展開されているため、英語力の低い学生の中には難度の高い英文に出くわすと勘やフィーリングに頼った読解をおこない誤読するケースが少なからずあることである。従って精読に配慮したリーディングの授業の実施が望まれる。

次に立命館大学の英語カリキュラムの優れている点について述べる。一点目は4技能全般を向上させるように配慮された非常にバランスのとれたカリキュラムであること。二点目としては将来理系の学生の多くが大学院に進学することを踏まえ、研究発表で必要とされる口頭でのコミュニケーション能力の伸長やプレゼンテーションの技法の習熟に対してかなりの配慮がなされている点も評価できる。三点目としては習熟度別クラス編成や Minus Point System が導入されているので、授業担当者が学生のレベルを気にしたり、私語を注意したりすることも極めて少ないので、担当者にとって授業がおこないやすいことも高く評価できる。

以上見てきた両大学の英語カリキュラムは同志社大学の場合、教育理念の一つである liberal arts を重視したもの、立命館大学は理系の研究者の育成のための専門・実用英語に特化したものといえるであろう。従ってカリキュラム作成のための現実的な制約を考慮していない提言も散見されるかと思うが、望蜀の言としてご理解いただければと思う。

今回の実践報告が今年度から TOEIC 対策の30分間の授業の実施および学生の専門に関連した講読テキストの採択を義務付けられることで、ESP カリキュラムに舵を切られた同志社女子大学の今後の英語教育に資する点があ

ることを願い本稿を結ばせていただく。

1. 大綱化以降の大学の英語カリキュラムの進展に関しては『これからの大学英語教育 CALL を活かした指導システムの構築』に収録されている「大学英語教育への提言——カリキュラム開発へのシステムアプローチ」(1-46)を参照されたい。
2. ESP の中には、「学問的目的の英語 (English for academic purposes/EAP)、科学及び工学英語 (English for science and technology/EST)、ビジネス英語 (English for business)、看護英語 (English for nursing) などが含まれる。『改定版 英語教育用語辞典』(103)

立命館の理工学部と情報理工学部の英語カリキュラムは English for academic purposes と English for science and technology を折衷したものである。BKC の経済および経営の両学部では English for business にもとづく英語カリキュラムが実践されている。ESP に関する更に詳しい情報に関しては『応用言語学事典』の ESP の項を参照されたい。
3. 文化情報学部は文理が融合した学部であるが、本稿では文系学部として扱った。
4. 筆者が立命館大学の両学部の参加者326名と同志社大学の文系の参加者を対象に Nation の Vocabulary Levels Test を前期の1週目と15週目に実施して単語の語彙数の伸びを比較した調査では、立命館の両学部の語彙数の伸びの平均が67語であったのに対し、同志社では平均131語増加した。詳しくは Morinaga (2006) “Which is More Effective in Developing Students’ Vocabularies, ESP or Non-ESP Programs?” を参照されたい。
5. 近年池上彰 (2013)『学び続ける力』、斎藤兆史 (2013)『教養の力 東大駒場で学ぶこと』等の Liberal Arts 再評価の書籍が出版され、また2012年には日本国際教養学会が設立され教育現場での教養教育の復権が目指されている。

筆者は葉袋・森永 (2009)『名文で養う英語精読力』および斎藤・中村 (2009)『文学で学ぶ英語リーディング』を用いて授業をおこなった3クラスの学生に対して、文学が教養を高める上でどの程度効果があるのか、また大学で教養を深める授業の必要性に関してアンケート紙調査をおこなった。「文学作品が教養を高める上で効果のある教材かどうか」の質問に対し87名の受講者のうち20名が「強くそう思う」と答え、58名が「そう思う」と回答した。また「文学作品を大学で教える意義があるかどうか」という質問に対しては19名が「強くそう思う」と答え、52名が「そう思う」と回答した。またこの同じクラスの参加者80名を対象に実施した Vocabulary Levels Test, Standard Grammar Test of the 7th version,

C-test の3種類のテストを使用して受講生の語彙力、文法力、全般的な英語力の増減を調査した結果、初回のテスト結果よりも14, 15週目で実施したテストの得点が伸びたことが判明した。Vocabulary Levels Test 平均で409語の語彙数の増加がみられた。Standard Grammar Test of the 7th version では60点満点のテストで平均1点の伸びがみられた。C-test 100点満点のテストで平均6点の伸びがみられた。従って文学作品は教養を高める上でかなり効果のある教材だと学生が考えており、かつ英語力を伸ばす上でも効果のある教材だといえる。

引用・参考文献

- 池上彰 (2013) 『学び続ける力』東京：講談社
- 斎藤兆史 (2013) 『教養の力 東大駒場で学ぶこと』東京：集英社
- 小池生夫編集主幹 (2033) 『応用言語学事典』東京：研究社
- 白畑知彦、富田祐一、村野井仁、若林茂則著 (2009) 『英語教育用語辞典』東京：大修館書店。
- 斎藤兆史・中村哲子編注 (2009) 『文学で学ぶ英語リーディング』研究社：東京
- 竹蓋幸生・水光雅則編集 (2005) 『これからの大学英語教育 CALL を活かした指導システムの構築』岩波書店：東京
- 葉袋善郎編著・森永弘司企画・編集協力 (2009) 『名文で養う英語精読力』研究社：東京
- Morinaga, K. (2006). "Which is More Effective in Developing Students' Vocabularies, ESP or Non-ESP Programs?" Asia TEFL 2006 Fukuoka Convention, Seinangakuin University.
- 森永弘司・佐藤香苗 (2008a) 「理系のリメディアル・レベルの学生における英語のニーズ・アナリシスの一事例研究」日本リメディアル教育学会第4回全国大会。
- 森永弘司・前田悦子 (2008b) 「文系学部——主として法学部、経済学部、商学部——の学生を対象としたニーズ・アナリシスの試み」外国語教育メディア学会2008年度関西支部秋季大会。
- 森永弘司・佐藤香苗 (2009) 「より良い大学英語教育カリキュラムを作成するためのニーズ・アナリシス調査」第35回全国英語教育学会。
- 森永弘司 (2010) 「よりよい大学英語カリキュラムを作成するための質問紙を利用したニーズ・アナリシス調査」『同志社大学教育開発センター年報 第1号』3-15
- 森永弘司 (2011) 「精読法授業開講の必要性——教養課程での必修及び選択授業での精読法の試み——」『同志社大学教育開発センター年報 第2号』49-62

森永弘司・池上久美子・松村延昭（2012）「Needs Analysis の観点からみた同志社女子大学共通教育における英語教育の特徴と教育的示唆」Asphodel 第47号、212-236

Morinaga, K. (2013) "Consideration of the Literary Texts from the Three Viewpoints: Heightening Students' Motivations to Read, Enhancing their Cultures and Improving their English Proficiencies" 4th Liberlit Conference. Meijigakuin University.

Richards, J. C. (2001). *Curriculum Development in Language Teaching*, Cambridge: Cambridge University Press.

付記

本稿は、外国語教育メディア学会2008年度関西支部秋季大会（神戸学院大学、2008年10月）、第35回全国英語教育学会（鳥取大学、2009年8月）における口頭発表の原稿を修正し加筆したものである。

謝辞

同志社大学のアンケート調査紙の入力をして頂いた同志社大学嘱託講師の前田悦子先生と立命館大学のアンケート調査紙の実施と入力をして頂いた元立命館大学嘱託講師の佐藤香苗先生に感謝申し上げます。